

備える

Vol. 191

総合芸術としてのバレエをつくる

熊川哲也

クラシック・バレエは、音楽や美術、衣装、照明など、言葉以外のあらゆる芸術要素が含まれ、デザイナー、ミュージシャン、ダンサーすべてをリスペクトする総合芸術です。私はダンサーとして、これまで国内外の数々の劇場で踊ってきたなかで、舞台環境が与える影響の大きさをシビアに感じてきました。気持ちよく踊れる空間では、それらの要素がダンサーのエネルギーになり、踊りの質につながっていきます。料理が味だけではなく盛りつけや場の雰囲気も大事なのと同様に、舞台もダンサーだけが美しくてもダメなのです。踊りは求愛や喜びを表現したり、神に捧げる感謝の行為であったりと、言葉が生まれる以前からのものであり、

我々の身体は無限大の表現ができます。その延長線上にあるバレエは、言葉以上の表現方法だと思っています。一方でバレエは高尚な芸術で、相応の知識がないと理解し難いと思われる方もいらつしゃるかもしれませんが、しかし、美しいものを美しいと受信する感性があればよく、美しい景色を見るときと同じような感動をそこに重ねてくたされればよいのです。そのうえで、高尚な世界と違って楽しんでくださるなら嬉しいことです。26歳でバレエ団を設立して10年ほど経った頃から、古典作品の奥深さに重みを感じるようになり、クラシック・バレエを継承し伝えていかななくては、という思いが強くなりました。我々は

今、苦境に立たされていますが、長い年月を経ても感動させる力強さと美しさを兼ね備える古典作品をはじめ、私は今こそバレエの素晴らしさを伝えるという使命感を強く感じています。新型コロナウイルスという文明の最大の危機に瀕し、バレエスクールの生徒もオンラインレッスンを強いられました。当初予定していた形での発表会は叶いませんでしたが、生徒が2ヵ月ぶりに発表会の曲を実際にスタジオで踊る姿を見たときには涙腺が緩み、これは映像などのフィルターを通して見るものではないと改めて感じました。生の舞台は、空間という三次元に時間を加えて四次元、そこにさらにセリフのない愛や喜びという感情表現が加

わった五次元の世界だと思っています。この世界に長年携わってきて、生の舞台の良さはわかりきっていたことだと思っていました。それでも、プランクのあつたおかげで、強烈なインパクトで体に沁みこんでくるものがありました。なんでも手軽に映像で見られる時代ですが、ライブというのは絶対に必要です。人間の温かい交流をつぶさに感じられる、総合芸術としてのバレエをつくっていきたいと思います。そして、私もその時の自分に相応しい、プラスになる作品があれば、ぜひ舞台上に立ちたいと思っています。

創



Photo ©Mamoru Kikawa

くまかわ・てつや

北海道生まれ。10歳よりバレエを始める。1987年、英国ロイヤル・バレエ学校に入学。89年、ローザンヌ国際バレエ・コンクールで日本人初のゴールド・メダルを受賞。同年、東洋人として初めて英国ロイヤル・バレエ団に入団。93年、プリンシパルに任命された。98年、同バレエ団を退団。99年、Kバレエカンパニーを創立。代表的な演出・振付作品に『クレオパトラ』『マダム・バタフライ』『カルミナ・ブラーナ』など。03年にKバレエスクールを開校、後進の育成にも力を入れている。12年、Bunkamura オーチャードホール芸術監督に就任。13年、紫綬褒章受章。

K-BALLET COMPANY『くるみ割り人形』
2020年12月2日～6日 Bunkamura オーチャードホールにて
公演予定